

- ◇ 特別展「鎌倉御家人 平子氏の西遷・北遷」によせて
- ◇ 体験学習・夏休み特集
- ◇ <研究余話> 三殿台遺跡の発掘と集落遺跡研究
- ◇ 収集・収蔵資料の紹介[18] 金沢・近江八景図屏風
- ◇ <常設展示室探検> 六浦地形復元模型
- ◇ 三館連携「古代を考える」展
- ◇ ちよいとミュージアムショップたいむ
- ◇ <知っていますか?> フロアレクチャー

# 横浜市 歴史博物館 NEWS 17 2003・10



● 弥生時代中期の各種の石の斧

特別展

# 「鎌倉御家人 平子氏の西遷・北遷」 によせて

横浜に關係する鎌倉時代の武士として、北条義時と二俣川で戦つて敗れた畠山重忠が有名です。しかし、この他にも市域には、鎌倉御家人として師岡氏・都筑氏・鴨志田氏・奈良氏・森氏・平子氏などが展開していました。これらの武士の内、中世を通じて、史料からその後の動向を追えるものは少ないのですが、平子氏はその例外です。

当博物館では、常設展示の中世展示室に「平子氏の西遷」というコーナーを設け、その活躍の一部を紹介しています。しかし、それでは到底説明できるものではなく、特別展を開催し、同氏の活躍の全貌を紹介することにしました。

鎌倉時代になると、関東の有力御家人は、全国各地に領地を与えられ、一族を派遣します。こうした武士を西遷・北遷武士と呼んでいます。これによって武蔵・相模の武士が全国に拡がることになりました。

武蔵国久良岐郡平子郷（横浜市磯子・

中・南区付近）に本

拠地を置いた平子氏もそ

うした武士団の一つで、同郷

を拠点としながらも、一族は周防国吉敷郡仁保荘（山口県山口市）や越後国山田郷の地頭として赴き、西遷・北遷を遂げています。

では先ず、周防国仁保荘に赴いた一族について紹介します。

仁保荘に入部し周防平子氏の祖となつたのは重経です。三浦氏系図によれば、治承四年（一一八〇）石橋山の合戦で戦功をたて、その賞として吉敷郡内の仁保・深野・長野・吉田・恒富の五箇地を賜り、建久八年（一一九七）に仁保荘に下向しています。その後重経の系統が同荘を拠点とし、一族を分立して支配体制を確立していきます。南北朝期以降周防国守護大内氏の有力な家臣となり、同氏の中国地方での勢力伸長とともに、その所領も拡大し最盛期を迎えます。のちには仁保氏を名乗り、大内氏が毛利氏に



木造平子重経（沙弥西仁）坐像 一編 山口県 源久寺蔵 重要文化財

よって滅ぼされるとその家臣となり、中世を生き抜いています。

次に、越後国の平子氏について紹介します。

越後への平子氏の入部時期についてははっきりしませんが、寛喜三年（一二三二）に経季が子息経久に譲った所領の中に、越後国山田郷地頭職がありました。経久は石川を姓とする平子氏の庶子で、まず庶子が進出したものと思われま

す。鎌倉時代の平子氏の越後での動向はこの後はっきりしませんが、南北朝期頃から活躍を示す史料が見受けられる

ようになります。越後守護が上杉氏になると関東の武士にはその家臣として同行するものがあるので、平子氏も同時期に上杉氏とともに越後に入ったものとも考えられます。一五世紀になると、守護上杉氏の有力家臣として政治の表舞台に登場します。その後長尾為景や上杉謙信の時代になってもその武将として名を馳せています。

では最後に、本拠地の武蔵平子氏はどうであったかをみます。

鎌倉時代には『吾妻鏡』などに幕府の命に従い随兵したり、京都の神社の修復にかかわったりした記事が見られるものの、それ以降明確にその動向を伝える史料がありません。永享十一年（一四三九）、永享の乱の時鎌倉公方足利持氏の近臣として戦い、討ち死にした平子因幡守の名が見える程度です。しかし、平子氏の菩提寺であった寶生寺の文書などから、室町期から戦国期まで平子氏が平子郷を支配していたことは相違ないものと思われま

す。最終的には永正九年（一五一二）までその存在が確認できるので

す。しかし、これを境にその消息は途絶えてしま

武蔵から周防や越後に進出し、中世を生き抜いた平子氏は、それぞれの地域に多くの資料を残し、その資料から現在にその動向を追える全国的に見ても数少ない武士の一つです。

本特別展では、今日に残された関連資料を一堂に集め、市域を代表する中世武士の知られざる活躍を紹介します。

（遠藤廣昭）

# 体験学習・夏休み特集



体験学習・夏休み特集は、今年の冷夏などものともせず、参加者の熱気・やる気にあふれ、盛況のうちに終了いたしました。

体験学習は、小学校一年生から六年生とそのご家族が参加の対象となります。第一回は七月二九日のまゆ細工から始まり、八月二四日の土偶の野焼きまで、のべ五〇〇名に参加いただきました。

第二回は染めもの（万祝<sup>まいわ</sup>い染め）でし



まゆ細工でかわいいカッパができました

た。この体験は、染め付けた顔料を乾燥させる時間が必要のため、当日に完成品を見ることができません。後日、別の体験学習に参加した際に完成品を持参してくれた子どもがいてスタッフを感激させました。

第三回目的の土偶作りでは、なれない土粘土に四苦八苦しながら、みみずく土偶を作りました。同じ見本を見ながら作るのですが、出来上がりはとても個性的な土偶になります。

夏休み最後の体験学習は、勾玉作りです。この時期に行う学芸員実習の実習生の指導のもと、熱心にメモをとりながら話を聞いているのは、夏休みの宿題にするつもりなのでしょうか。

通常の体験学習の申し込みは、開催当日に直接会場である大塚・歳勝土遺跡公園内の工房へ来ていただいています。しかし、夏休み中は申し込みが定員を超えてしまうことが予想されるため、あらかじめ往復はがきでの事前申し込み制となっています。

今年は市域や近隣の小学校へもチラシを配布した効果がでたのか、定員四二〇名に對して、一一〇〇名を超える申し込みをい

いただきました。関心をもっていたいただいたことを素直に喜びつつ、受け入れ可能なぎりぎりまで定員を増やしても、申込者の半数以上を抽選でお断りしなければならぬ状況に、うれしいやら申し訳ないやら、複雑な心境でした。

こうして体験学習当日を迎えるわけですが、残念なことに連絡なしでキャンセルする方がいます。事前に連絡していただければ、落選した方を繰り上げ当選にできます。受付名簿の出欠欄の空白をみると、落選した方たちの残念そうな顔がさらに残念そうになるのを想像してため息がでます。他の催し物でもそうですが、参加を取りやめる際にはできるだけ早くご連絡いただけるよう、ご協力をお願いします。

それはさておき、各体験で出来上がったものを持って帰る時は、皆笑顔です。

参加者の皆さんへ市域の歴史を案内し、体験していただき、夏の思い出の一つになれることをスタッフも皆うれしく思っています。



みんな顔が違う個性的な土偶です

これから体験学習に関心をもってきてくださるみなさんへ、より多くの歴史とふれあっていたけりよう、日々努めていきたいと思ひます。  
(亦野あゆみ)

## 三殿台遺跡の発掘と集落遺跡研究

## 磯子の丘・三殿台

市営地下鉄蒔田駅から南へ十五分ほど歩くと、右手に岡村小学校へと上がる坂が見えてきます。三殿台遺跡は小学校に隣接し、さらに一段高い標高約五十五mの台地平坦面に位置しています。晴れた日に遺跡の縁まで歩を進めると、南東には輝く東京湾が視界に入り、はるかに房総半島を望むこともできます。

三殿台遺跡は明治期から知られており、一八九九年に藤田清玖氏が岡村小字三殿台にある高台の畑の側面に貝塚があるのを確認し、その後鳥居龍蔵氏と踏査したことが記録されています。横浜市埋蔵文化財センター(当時)によれば、遺跡の乗る平坦面を中心とした約四万㎡が本来の遺跡範囲であったと推定され、明治期以来さかんに資料収集が行われていたようです。しかしながら小学校の建設と戦後の宅地化でその多くは失われ、台地頂部の約一万㎡のみが開発されずに野菜畑として残っていたのです。横浜市史編纂事業に伴って一九五五年にも踏査が行われており、その際縄文・弥生・古墳の各時代の資料や台地の縁辺に形成された貝塚

が確認されています。以前から採集されていた資料とあわせて、あらためて重要な遺跡であることが知られたわけです。

## もちあがった開発計画

高度経済成長期における人口の増大が小学校の整備拡充を後押しし、昭和三〇年代以降、多くの学校建設が行われることになりました。滝頭小学校岡村分校(現・岡村小学校)においても、児童数の増加を背景に、校地を拡張する計画がもちあがりました。三殿台遺跡は事業計画の対象地とされ、削平の危機を迎えたのです。

この状況に対して、当時横浜市史の編集・執筆に携わり、南堀貝塚など地域の遺跡調査を進めていた和島誠一氏は、遺跡の記録を前提とした調査を行うことを計画しました。和島氏は論文「原始聚落の構成」によって、原始古代の集落構成の歴史的展開に関する議論に先鞭をつけた研究者です。三殿台の台地頂部は一九五八年頃に市に買収され、削平する前に調査を行うこととなりました。和島氏の指導の下、一九五九年から横浜市立大学の史学研究室によって行われた予備調

査では、台地の全面にわたって竪穴住居址等が分布していることを確認し、弥生時代・古墳時代の住居址を実際に発掘しました。その後一九六一年に和島氏を委員長とする日本考古学協会三殿台遺跡調査特別委員会が、小学校の夏休み期間を利用して大規模な調査を実施したのです。

## 大型集落の発掘と保存

この調査には横浜市当局の綿密な調整作業のもとに、国・県・市から計一〇〇万円の緊急調査費が計上され、岡村分校校舎の宿泊施設としての提供、地元への支援態勢の確立、延べ三五〇名にのぼる市民の発掘調査への参加、重機の導入などの最大限の協力と工夫がなされました。また、横浜市立大学、國學院大学、立正大学、日本大学の四大学がそれぞれ中心となる調査班が発掘から報告に至るまで責任を分担して調査にあたりました。

その結果、東西約八〇m、南北約一〇〇mの平坦面をもつ台地上の調査区全面から、縄文・弥生・古墳の各時代にわたる二五〇軒以上の竪穴住居址が発見されました。なかでも弥生時代中・後期に相

当するものは一五一軒にのぼり、出土資料には土器・石器等のほか、市域では現在でも出土例の少ない青銅器が含まれるなど、きわめて良好な集落遺跡であることがわかったのです。当時調査された集落遺跡としては質量ともに破格の内容を持つものであったため、発掘が進むにつれて研究者や市民から保存を望む声もあがり始めました。

三殿台遺跡は学校用地として調査されたもので、小学校の拡張は地元の悲願でもありましたが、遺跡の重要性が考慮され、別の形で学校の施設設備の充実を図ることによって周辺住民の理解を得ることとなりました。その結果、遺跡は埋め戻した上で保存することが決定されたのです。なお、調査団は一九六五年に「三殿台―横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調



三殿台遺跡から東京湾を望む (2003年9月)

「査報告」を刊行し、集落の全体像と住居址の具体的な調査成果を明らかにしています。そして翌一九六六年、三殿台遺跡は国史跡に指定され、保存整備の措置が講じられることになったのです。

## 集落研究への貢献と課題

三殿台遺跡の調査は、竪穴住居址単独の調査が主体だったそれまでの発掘に対して、広い範囲を面的に調査し、多数の竪穴住居址を掘り出すことで、集落の構成や変遷を考えるためにきわめて有益な情報をもたらしました。

竪穴住居址一五一軒にも及ぶ弥生時代の遺構を検討した結果、それらがかなり長期にわたるムラの跡であったことが判明し、その変遷過程についてもある程度具体的な姿を追うことができるようになりました。田中義昭氏は弥生時代中期の



写真上／発掘当時の三殿台遺跡（1961年）手前に見えるのが滝頭小学校岡村分校（現・岡村小学校）



写真中／306-C号住居址からまとめて出土した弥生土器

写真下／竪穴住居址のまわりで説明を受ける人々



三殿台遺跡を四つの小期に分け、集落の変遷案を提示しました。そしてその成果を、朝光寺原遺跡や港北ニュータウン地域にある遺跡群を分析するための基礎資料としたのです。関東地方における弥生時代に相当する集落遺跡の本格的な検討は、この三殿台遺跡から開始されたと言つてよいのです。

しかし、調査の成果を手放しに喜ぶことはできません。三殿台遺跡では、確かに多数の住居址を調査しましたが、現在の研究からみると集落遺跡の全体を掘り切ったものではありません。本来の遺跡全体は調査面積のほぼ四倍に相当するもので、かなり多くの遺構が調査以前に破壊されたものと推定されます。調査は弥生時代の集落の検討を飛躍的に進めるものでしたが、集落遺跡を構成する全てを明らかにしたとは言えないのです。

また、調査時には単に「溝」とされていた集落内の方形周溝墓の存在が目立っています。鈴木重信氏らは一九九一年に行った遺跡南東斜面の調査報告の中で、これを方形周溝墓として積極的に評価してゆくべきだと述べています。安藤広道氏も、弥生集落の中に特異的にあらわれる長さ二〇m以上となる大型の方形周溝墓の存在に注目し、三殿台遺跡においても同様の墓が存在したことを指摘するとともに、三殿台遺跡が集落構成を検討する上で重要な遺跡であることを強調しています。

これらの情報を合わせれば、三殿台遺跡は今私たちが現地で実感するよりもかなり大きな集落であったに違いありません。そして弥生時代には集落内に複数の大型方形周溝墓をもち、さらに近隣に方形周溝墓数十基で構成される墓域をもっていた可能性もあります。

しかし、それらを確かめるための情報はほとんど失われてしまいました。そして大型方形周溝墓の内容も、今となっては現地で検証することは困難です。遺跡の発掘は、実は記録と引き換えに遺跡を壊す行為でもあります。方形周溝墓への認識そのものがなかった一九六一年当時、墓の可能性を前提とした調査は望むべくもありません。さらに三殿台遺跡は一万㎡の遺跡を実質的に一ヶ月半で掘ってしまったのであり、現在の発掘からは考えられない速さでした。発掘された範囲は保存されましたが、それは以前に破壊さ

れた広大な部分や調査で失われた情報と引き換えであったこと、そして失われた遺跡は二度と取り戻すことができないことを、忘れてはならないのです。

## 三殿台遺跡の現在

国史跡に指定された後、一九六七年一月に横浜市三殿台考古館が設置され、現地では遺跡の保存、資料の展示・公開が続いています。史跡内には展示室と収蔵庫、管理事務所と資料保管倉庫のほかに、発掘当時の住居址を保存・公開するための住居跡保護棟、縄文・弥生・古墳の各時代の復元住居三棟などが置かれ、古代の集落をしのぶことのできる空間づくりが行われています。

発掘から四〇年あまりを経て、当時のことは徐々に忘れられつつありますが、三殿台遺跡の考古学史上での意義は些かも色褪せてはいないのです。（小倉淳一）

### ☆参考文献

- 安藤広道 一九九八 「横浜発掘物語―目で見る発掘の歴史―」 横浜市歴史博物館
- 安藤広道 二〇〇三 「弥生時代集落群の地域単位とその構造―東京湾西岸域における地域社会の「様相」―」 『考古学研究』第五〇巻第一号
- 鈴木重信ほか 一九九二 「三殿台南東斜面遺跡試掘調査報告」 横浜市埋蔵文化センター
- 田中義昭 一九七六 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」 『考古学研究』第二二巻第三号
- 田中義昭 一九七九 「南関東の弥生時代集落」 『考古学研究』第二五巻第四号
- 藤田清弘 一九九九 「武蔵国久良木郡屏風ヶ浦岡村貝塚発見報告」 『東京人類学』第四十巻第五十八号
- 和島誠一 一九九八 「原始集落の構成」 『日本歴史学講座』東京大学出版会
- 和島誠一 一九九八 「三殿台―横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告」 横浜市教育委員会
- ☆三殿台考古館案内
- 所在地 横浜市磯子区岡村四―一一―二二
- 電話 〇四五（七六）四五七―
- 交通 市営地下鉄田町駅南口より徒歩一五分

# 金沢・近江八景図屏風

現在の横浜市金沢区に属する金沢・六浦の地に存在した金沢八景（洲崎晴嵐・瀬戸秋月・小泉夜雨・乙艦帰帆・称名晚鐘・平潟落雁・野島夕照・内川暮雪）と、琵琶湖の河口部周辺に位置する近江八景（唐崎夜雨・石山秋月・瀬田夕照・比良暮雪・矢橋帰帆・栗津晴嵐・堅田落雁・三井晚鐘）は、中国の瀟湘八景（瀟湘夜雨・洞庭秋月・漁村夕照・江天暮雪・遠浦帰帆・山市晴嵐・平沙落雁・煙寺晚鐘）に範をとった景勝地として知ら

れていました。こうした晴嵐・秋月・夜雨・帰帆・晚鐘・落雁・夕照・暮雪といった多様な景観を複合的に構成している「八景」の景観は、単なる八つの風景の集合体ではなく、和歌や漢詩といった言葉Ⅱ音声を媒介として伝えられるその土地の歴史性を基層にふくみ込みながら、さまざまな自然現象を総合的に存在させる箱庭的宇宙としての一体性をもつものでした。同時にまた、そうした景観を多くのの人々が観賞できるような大都市の周辺に存在することが、

「八景」の

ような名所が存立するための不可欠な条件でもありま

す。その意味では、武

家政治の発祥の地であ

る鎌倉に隣接すると共

に江戸時代の政治の中

心地に近接する金沢八

景と、古代以来の大都市である京都周辺に位置する近江八景は、それぞれ東日本と西日本を代表する「八景」型の景観とい

うことができます。

今回紹介する「金沢・近江八景図屏風」は、向かって右側の右隻に金沢八景、左側に近江八景が配される六曲一双の屏風です。残念ながら落款などはなく作者は不明ですが、東西を代表する「八景」型の景観を一望のもとに臨むものです、右隻・左隻共に、中央部にみられる金沢の入り海や琵琶湖といった水面の右手には瀬戸橋と瀬田の唐橋が配され、また左端の上部に富士山や比叡山という雪で覆われた高山が置かれるなど、両者をで

かぎり同一の構図で描こうとする意図が感じられ、当初から一対のものとして作成されたことがうかがえます。

右隻の金沢八景の構図をもう少し細かくみると、第一扇・第二扇の中央部に瀬戸神社・瀬戸橋・弁天島、第三扇・第四扇の下部に能見堂、その上部に入り海を隔てて野島、第五扇・第六扇の下部に称名寺が、それぞれ配置されています。手前の能見堂はやや小高く表現されており、当時の代表的な金沢八景の景観方法であった能見堂から金沢八景を一望する構図で描かれていることがわかります。

（斉藤 司）

写真上／「右隻 金沢八景図屏風」

写真下／「左隻 近江八景図屏風」



## 常設展示室探検

### 六浦地形復元模型

六浦は中世を通じて、政治・経済の中心地であった都市鎌倉を支える港の一つとして繁栄しました。「むつら」と呼ばれたこの地域は、鎌倉に幕府が開かれると、鎌倉に住む武士や僧侶、庶民たちの生活を支える物資が集まる港として、また内外に向かう海の玄関口として、重要な役割を担いました。六浦には諸国から商人や職人などが多く集まり、さまざまな産業が発達し、大変な賑わいをみせた地域でした。また、称名寺など



を中心に、鎌倉に劣らない仏教文化が栄えた地域でもありました。模型では、埋め立てによってほとんど失われてしまった中世の海岸線や、開発によって失われた景観を復元しました。近世に金沢八景と呼ばれた風光明媚な景観が蘇りみえられました。模型の前面のモニターでは、中世六浦の武士、街道、産業、寺社などが分かり易く紹介されています。あわせてご覧ください。

## 三館連携

# 「古代を考える」展

この初夏に開催した企画展「古代を考えるⅢ 文字との出会い―南武蔵・相模地域の地域社会と文字」(五月二四日～七月六日)に開催は、横浜をふくむ古代の南武蔵・相模の地域社会・ムラに文字がどのように受け入れられていったかを探索する展覧会であり、その前に開催した特別展「古代日本文字のある風景―金印から正倉院文書まで―」の地域版としての位置づけをもっていました。同時に、川崎市市民ミュージアム、府中市郷土の森博物館と連携し、「古代を考える」と銘打った展覧会でした。

市民ミュージアムでは「古代を考えるⅠ 郡の役所と寺院」(四月一日～六月一日)を開催し、古墳遺構から寺院建立への地域社会の動き、地域支配の拠点となった郡家と、各地に建立された寺院に焦点をあて、川崎市域をふくめ、古代の地域社会の様相を探りました。府中市郷土の森博物館の「古代を考



国司の姿の学芸員から解説を受けるツアー参加者  
(府中市郷土の森博物館にて)



利用者が今ひとつだったシャトルバス

るⅡ 武蔵の国府と国分寺」(四月二六日～六月二三日)では、近接して設置された国府と国分寺の多大な発掘成果をふまえ、その姿や造営のシステム、その機能や特質に迫りました。

いずれも古代という時代を対象とし、地域社会の核となる国府と国分寺、郡家と寺院をとりあげ、古代の地域社会の様相を具体的に描き出したもので、当館をはじめ他の二館の展覧会を見学していただき、古代の国府・郡家・寺院・ムラの問題を通して、古代の地域社会の姿への理解を深めてもらうことを意図しました。

関連展示では、三館の展覧会を少しでも多くみていただくこと、入館料の特別割引を実施しました。どこか一館の入場券をもつていくと、他の館の入館料は割引になるというシステムです。これは一昨年の東海道関係の展覧会でも採用した方式でした。

また、いくつかのイベントも協力して開きました。

まず四月二九日(火・祝)には、古代武蔵国研究会の主催、三館の後援により「シンボジウム古代武蔵国を考える―役所・寺院・文字―」を府中市グリーンプラザで開催しました。シンボジウムの内容は三館の展覧会のテーマに則したもので、当日は四八〇名余の参加者があり、準備した資料集が完売するなど、好評を博しました。

当館の展覧会は始まっていますが、三館の連携展示会が開催されることを広く知らせることでできる機会となりました。

三館が同時開催している期間は三週間ほどでしたが、この間に、各館で三館を一日で回るバス・ツアーを行いました。各館の定員は五〇名でしたが、多数の方々の応募があり、抽選となりました。バス・ツアーでは、展示を担当した学芸員が車内で解説するとともに、各会場では、国司、郡司、写経生の姿に扮した担当学芸員が、丁寧な解説を行います。川崎・府中・横浜と一日で三館の展示を見て回るのは少々きつかったかもしれませんが、足していただいた方々には満足しています。

また、当館と川崎市市民ミュージアムの間にシャトルバスを運行しました。両館は直線距離にするとそれほど遠くありませんが、既存の交通機関を利用すると、乗換なども面倒で、かなり時間がかかってしまいます。そこで、両館のドアとドアをつなぐバスを用意し、両館の展覧会をみていただく便に供しました。シャトルバスはゴールデン・ウィークと五月末・六月の日曜日の計八日間運行しました。しかしながら、利用いただいた方は少なく、宣伝が不足していたことを痛感させられました。

展覧会をご覧いただいた方々のアンケートの中には、「三館での関連展示は良い企画だ」「三館すべてを見学し、古代の地域社会を満喫した」など、好意的な意見が多くありました。しかし、「どうせなら期間を統一して欲しかった」などの意見も出されました。今後、機会を作り、近隣の博物館とさまざまな連携を模索していきたいと考えています。

(平野卓治)

ちよいと

## ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

## よみがえった 縄文の造形



|        |        |         |         |
|--------|--------|---------|---------|
| 紋様カップ  | 3,150円 | 黒曜石のナイフ | 10,500円 |
| パレット   | 2,625円 | 土笛ネックレス | 1,575円  |
| 素焼きカップ | 2,625円 |         |         |

以前にこのコーナーでもご紹介した草木染めコースターや芝山漆器のブローチなど、ミュージアムショップでは手作りのグッズも販売しています。今回ご紹介するのは横浜在住の造形作家・平田篤史さんの作品です。

「六歳の頃に自宅の裏山で縄文土器と出会った」という平田さん。それ以来、縄文人にაცოგაれ土器や縄文をテーマにした作品を作り続けているそうです。

平田さんの作品は単に縄文土器を復元するのではなく、形式にこだわらない独創的なものです。しかしその製法は縄文人さながら、土器作りには自宅近くの工事現場から出る土を使い野焼きをして仕上げる、土器作りにはシカの角を使うといったこだわりです。

そんな平田さんが創り出す現代版縄文の造形をぜひお手に取ってご覧ください。

# INFORMATION

## 今後の企画展のお知らせ

- ◎特別展「鎌倉御家人 平子氏の西遷・北遷」  
10月18日(土)～11月24日(月)
- ◎「平成15年度 横浜市指定・登録文化財展／横浜の遺跡展」  
12月13日(土)～1月18日(日)
- ◎企画展「音と横浜—横浜で生まれた西洋楽器—」(仮題)  
2004年1月31日(土)～3月7日(日)

## 表紙写真は

弥生時代中期の大塚遺跡に暮らしていた人々は、磨いて仕上げた各種の石の斧を用いて、木を切ったり加工したりして暮らしの道具を作っていました。これらの石器を大陸系磨製石斧と呼んでいます。これらは稲作とともに伝わってきた道具と考えられていますが、弥生時代の後期には鉄器におきかわっていくのです。

## ??????? 知ってますか ???????

### フロアレクチャー

「専門の学芸員から説明を聞いたら、もっと楽しいのになあ！」

特別展・企画展をみた時、そんな感想をもちませんか。その時に活用していただきたいのがフロアレクチャーです。

横浜市歴史博物館では、年間4回程度の特別展・企画展を開催しています。展示会は、当館の学芸員が企画・立案し、資料を収集・展観する自主企画のものが主体です。この展示会の期間中の日曜日・祝日を中心とした2日間、午前と午後の2回、展示会担当の学芸員による展示解説、フロアレクチャーが行われます。展示会の意図・ねらい、見どころ、目玉となる資料、資料の背景にあるものなど、展示会場において展示品に則して、学芸員が丁寧に説明します。時にはテーマに沿った姿で行うこともあります。

1回の定員は30名となっており、参加費は無料ですが、展示会のチケットが必要です。具体的な日程や時間は、各展示会のポスター・チラシをご覧ください。学芸員の説明を聞きながら展示会をみると、思わぬ発見と驚きがありますよ。



(2003年4月1日～9月30日)

- 4月5日 特別展「古代日本 文字ある風景—金印から正倉院文書まで—」(5月11日まで)
- 4月13日 特別展講演会 東野治之「古代の文化交流と文化」
- 4月20日 特別展フロアレクチャー
- 4月26・27日 体験学習「まがたまづくり」
- 5月3日 特別展講演会 平川 南「古代東国と文字」
- 5月5日 特別展フロアレクチャー
- 5月14日 歴史講座「横浜の歴史」(6月18日まで連続6回)
- 5月24日 企画展「古代を考える」文字との出会い—南武蔵・相模の地域社会と文字—(7月6日まで)
- 5月24・25日 体験学習「まがたまづくり」
- 5月29日 ふるさと横浜探検「大塚遺跡と登呂遺跡」
- 6月15日 企画展フロアレクチャー
- 6月22日 企画展講演会 関 和彦「古代東国のムラと文字」
- 6月25日 歴史講座「横浜の歴史」特講＜海から見た横浜＞(7月23日まで連続5回)
- 6月29日 企画展フロアレクチャー
- 7月19日 収蔵資料展 ヘリー来航150周年記念 「ヘリー来航と東京湾」PART1 ヘリー来航と横浜(8月17日まで)
- 7月24日 ふるさと横浜探検「寺家の谷戸」
- 7月29日 体験学習「まゆ細工」
- 7月31日・8月1日 体験学習「そめもの(万祝染)」
- 8月6・7日 体験学習「土偶づくり」
- 8月22・23日 体験学習「まがたまづくり」
- 9月25日 ふるさと横浜探検「よこはま事はじめ—野毛地区—」
- 9月27・28日 体験学習「土偶づくり」

## 横浜市歴史博物館 ● 日誌 ●

## PR 読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をお寄せ下さい。ご応募いただいた方の中から抽選で10名様に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルTシャツと缶バッジを差し上げます。

はがきに、①お名前 ②ご住所 ③年齢 ④このニュースを手にした場所 ⑤Tシャツのご希望サイズ(L・M・

子供用140cm・120cmの4種類) ⑥ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館読者プレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。締め切りは2003年11月30日です。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。



## 横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

### 編集後記

山法師の実、ドングリ、アキアカネ…。遺跡公園も夏から秋へ少しずつ衣替えをしています。トンボは、古来より豊穣を象徴する昆虫とされてきました。その訪れで大塚遺跡の弥生人たちが収穫の秋を感じていたのかもしれない。博物館もいよいよ秋の特別展のシーズンを迎えます。今回は、横浜地域を本拠とした鎌倉御家人平子氏に焦点をあてて紹介します。

### ●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

### ●休館日

歴史博物館・大塚遺跡

月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

### ●常設展観覧料

| 区分      | 個人   | 団体<br>(20人以上1人に付き) |
|---------|------|--------------------|
| 一般      | 400円 | 320円               |
| 高校生・大学生 | 200円 | 160円               |
| 小学生・中学生 | 100円 | 80円                |

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

### ●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分

(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

### ●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

